

世俗を背負った男達

— 中世説話文学への一視点 —

はじめに

人は人との関わりの中で生きる。その人との関わりに決別を告げるにより、出家がはじまる。人との関わりに決別して出家する為には、それなりの契機や決断が必要である。忠実か否かは別にしても、周知の『西行物語』に語られる西行の出家の様子は、その間の事情を如実に物語っている。

親しき友である佐藤憲康と共に御所を退出した西行は、憲康の語る、

何事もただ夢幻の心地して、今日あればとて、明日を待つべき身とおぼえず、あはれ、いかなる便りもがな。さまを変へ、片山里の住まひも、あらまほしくこそおぼゆれ。

という言葉聞いて、共感を覚える。そして、明朝、鳥羽離宮へ参内する誘いに立ち寄ると、門のほとりに人が多数参集している。急いで行ってみると「殿は今宵、寝死にに死なせ給ひぬ」ということであった。「十九になる妻、七十有余なる母」を残している。この有様に接して世の無常を感じて、

「やがてここにて髻切らまほしく」思う。

夕方、御所より帰った西行は、四歳になる娘を見て、

過ぎにし方、出家を思ひとどまりしも、この娘ゆゑなり。

されば第六天の魔王は、一切衆生の仏にならむことを障へむが為に、妻子といふ絆を付け置き、出離の道を防ぐといへり。これを知りながら、いかで愛着の心をなさむや。これこそ陣の前の敵、煩惱の絆を切る初めなり

と、思つて縁より下に蹴落して出家の決意を示す。文字通り劇的といえる有様である。このような非情ともとれる場面を設定してその出家を語るのは、世俗の生活から離脱していくことの困難さを、裏付けることになろう。出家を決意することはなかなか難しい。事実西行の場合も妻を説得することは出来なかった。そのような困難さを乗り越えて念願の出家をとげる。本来ならば仏道に邁進すべき人も、俗世の時に作った世俗の縁を、常に後にもっているのである。いわば「世俗を背負って」生きていくことを余儀なくされているのである。

安東大隆

ここでは、出家者が残してきた世俗とどのように接し、またそのしがらみを超克していったかを、考えてみたい。そのことは出家者の人間像を明らかにすることにもなる。

1

さて、件の西行は劇的な出家を遂げた後、世俗との契りをどのように処理し、また対処していったのであろうか。

出家後十余年、「心にまかせぬ命なれば、二度故里に帰り、都の有様を見」と、「葎の門、草の戸鎖のみ深くして、鞆の寝屋と荒れはてたる所々、百六十余家」という変わり様であった。「故郷を慕ふ心に惹かれて、また帰り来ぬる事、わが心ながらもうたてしくおぼえて」二首の歌を詠む。西行は、望郷の気持ちを一方では、「うたてしく」と反省している。彼はその後、四国へ旅立つ。何年にもわたる旅の後再び京都を訪れる。

さて、俗世に残した最大の縁である妻子のその後は、どうであろうか。昔ゆかりの人のもとに留まって、夜もすがら昔今の話をする時に、この世に残した妻子の事を聞かされる。

さて、さばかりいとほしがらせ給ひし姫君の事、いとほしさよ。御出家ののち、やがて母御前も様を変へて、二年は姫君と一つ所におはせしが、九条の刑部卿の姫、冷泉院殿の御局と申す、御子にし参らせて、よにいとほしく参らせ給ひ候ひき。そのち母御前は、高野の麓、天野といふ所に、行ひておはしき。この七八年は、かりそめの

音信もなし。このほど冷泉院、当腹の御娘に、伯耆の三位殿と申す人を、婿に取りて、この姫御前を上臈女房にし参らせて待るが、ただ明け暮れは、仏神に御宮仕ひのみ申して、「今生にて、父の御行方を知らさせ給へ」とて、泣き給ふより他の御事なし

と語りければ、西行、聞き入れぬさまにもてなして、帰りけり。

と、一見無関心をよそおうのであるが、その翌日に冷泉院のあたりに出掛けて行き、娘に対面して、

ただ尼になりて、母と一つ所にて、後の世を助かり給へ。

と言ひ、出家を勧める。彼女も又、

われ四歳にして父に捨てられ、七歳にして母に別れ奉りて、中有の闇に迷ひ、人を恐ろしとのみ思ひて、明し暮し侍りき。されば、幼くよりして出家の志侍りしかども、女の身なれば、叶はぬ事のみあり。今うれしう、出家を遂げ侍りぬ。われに万宝を与へ給ふとも、ただ一日の夢なり。

今の教化の御言葉、要文を、後生の道のしるべにて、浄土にては三人必ず。

と述べて、出家をしてしまふ。『西行物語』ではこのように、娘との出会やその出家に至る事情について描いているが、

『発心集』（西行女子出家事 六卷）は、若干異なり、西行が常に娘の事を心に留めている様子が、詳しく述べられている。

西行にのみ視点をおいて、出家した後の世俗との係わりを見てきたが、常に出たはずの家を気かけ、それに関わって

存在している出家者の姿が見えてくる。また反面残された家族への影響も甚大であった。西行の家族は都合三人であったが、彼が出家することにより、他の二人とも同じ道をたどるのである。仏教的に考えれば、仏縁があったということである。火宅無常の世を厭い捨てて機縁が与えられ、しかも実行できたのであるから、申し分のないくらいめでたいことである。しかし、一方世俗の側に立って眺めると、西行が出家をしたことにより、他の二人の人生はいやおうなしに、変えられてしまったのである。出家ということは、本人はもとより残された家族その他の縁者にとつても、大きな決意と変化を伴うものであった。

2

次に、僧正遍昭を例にしてその軌跡を見よう。

遍昭は、俗名は良峯宗貞（安世の子）寛平二年の一月七十五歳で没している。嘉祥三年の三月に仁明天皇の崩御とともに三十五歳で出家している。その出家に至る事情から述べよう。

遍昭の説話は、諸書に散見されるのであるが、その概要を『今昔物語集』（巻十九―一）によって見ることにしたい。

仁明天皇の寵臣であった宗貞は、その崩御に遭遇して身の置所なく、

心ノ内ニ「此ノ世不幾ズ。法師ニ成テ、仏道ヲ修行セム」

ト思フ心深ク付ニケリ。

と、無常を観じて出家を思うのである。が、彼には妻子がい

た。

而ルニ、此ノ少将ハ、宮原ノ娘也ケル人ヲ妻トシテ、極ク哀レニ難去ク思ヒ通シテ過ケル程ニ、男子一人・女子一人ヲナム産セタリケル。妻独身ニシテ我レヨリ外ニ可憑キ無人シト思ケレバ、少将極テ心苦シク哀レニ思ト云ヘドモ、出家ノ心不退シテ、

天皇の御葬送の夜に、誰にも告げずに失踪してしまうのである。当然のことながら、家族はこの出家への心境の変化を知らないので、

妻子眷属泣キ迷テ、聞キ及ブ所ノ山々寺々ヲ尋ネ求ムト云ヘドモ、露、其ノ所ヲ不知ザリケリ。

その後遍昭は、横川に登って慈覚大師の弟子となって修行する。やがて諒暗等が終り、人々が日常の生活にかえる。そうしているうちに年月が経て、妻子に出会う。

而ル間、十月許ニ笠置ト云フ所ニ詣テ、只独リ礼堂ノ片角ニ、糞ヲ打敷テ行ヒ居タル程ニ、見レバ、人參ル。主ト見ユル女一人、女房立タル女一人、侍ト思シキ男一人、下ノ男女合ニ三人許ナム見ユル。居タル所ニ問許ヲ去キテ、此等ハ居ヌ。我ハ暗キ所ニ居タレバ、人有トモ不知シテ、忍テ仏ニ申ス事共粗ニ聞ユ。吉ク聞ケバ、此ノ女人申ス様「世ニ失ニシ人ノ有様知ラセ給ヘ」ト泣キ氣ハヒニテ哀ニ申ヲ、耳ヲ立テ吉ク聞ケバ、我が妻ニテ有シ人ノ氣ハヒニ聞キ成シツ。「我ヲ尋ネム為ニ此ク行フ也ケリト」思ヒ、哀レニ悲シキ事无限シ。

礼堂の片隅に休んでいると、残してきた妻子がやってきて、自分の消息を知らせてくれるように仏に頼んでいる。その様子を見た遍昭は「我ハ此処ニ有リトヤ云ハマシト」思ったのであるが、「知セテハ何ニカハセム、仏此ル中ヲバ別ネトコソ返タス教ヘ給ケル事ナレバ」と我慢をしている。翌朝になって礼堂より出ていくのをはるかに見送る。「今昔」の編者は、「吉ク心不强ザラム人ハ被知ナムカシ」と、遍昭に言わせている。そのことは、出家という行為が、常に世俗との一種の緊張感の中で成り立っていることを、物語っている。

遍昭の話は古くは『続本朝往生伝』(六六話) に見える。

僧正遍昭は承和の寵臣なり。俗名は宗貞。近衛将を経て、藏人頭に補せられたり。累葉清鼻の家より出でて、前疑後承の任に居せり。才操相兼ねて、衆望の帰するところなり。また若に長れたり。宮車の晏駕したまへるに及びて、恋慕に堪へず、遂にもて道に入れり。慈覚大師の弟子にして、安然和尚の師匠なり。難行苦行して、自ら効験多し。公家捨てずして、授くるに僧正の職をもてし、兼ねて御持僧となせり。(原漢文)

以下、天狗にまつわる逸話を記している。引用した部分は、仁明天皇の寵臣であった宗貞が、天皇の崩御にさいして出家して、慈覚大師の弟子となり修行して、功験あらたかであったということ述べている。つまり、出家者としての事跡を簡潔に記しとどめているのである。

一方『大和物語』には、世俗との係わりに視点を絞るよう

にして、叙述している。宗貞は、天皇の御葬送の夜逐電してしまつて、行方がわからない。彼には妻が三人いたが、「よろしくおもひける」妻一人には、「なを世に経じとなむ思ふ」と言っていたが、「かぎりなく思ひて子どもなどある妻」に對しては、「塵ばかりもさるけしきもみせざりけり。」というようにしていた。その理由は、「このことをかけてもいはば、女もいみじとおもふべし、我もえかくなるまじき心ちしければ、」と説明され、出家というものが、本人はもとより周りの人々にとつても、重大な決心を必要としていたことが理解出来る。従つて、逐電出家したことを知つた時の驚きは、ひとかたではなかつた。長谷寺に妻が参詣し遍昭との再会を祈願している時に、彼も又長谷寺に居てその一部始終を聞くのである。この部分は『今昔物語集』と同様の記述である。

(但し、『今昔』の方は「笠置ト云フ所」となっている。)

やがて諒暗が終り、多くの殿上人は、喪服を脱ぎ河原に出で禊ぎをする。その時に、童が柏に書いた文をもつてやってくる。それには「みな人は……」の歌が書かれている。その筆跡を見た人々は、遍昭が出家したことを理解するのである。五条の後(藤原順子)は内舎人を使いにしてあちこちを捜がさせるがみつからない。やつとのもことで尋ねあててみると、この大徳の顔容貌姿をみるに、悲しきこと物に似ず。その人にもあらず、陰のごとくになりて、たゞ衰をのみなむきたりける。少将にてありし時のさまいと清げなりしをおもひいでて、涙もとどまらざりけり。

という状態で昔の面影はみることもできない。

かぎりなき雲のよそに別るとも人を心にをくらざらめやは

という歌を後に送る。さらにその歌に対する返事を届けようとするが、「ありし所にも又なくなりけり」。

次には小野小町が正月に清水で出会った説話を載せる。小町が正月に清水に詣でた時に、「あやしう尊き法師のこゑにて読経し陀羅尼」をよんでいるのに出会う。その声は「いと尊くめでたうきこゆれば、ただなる人にはよにあらじ、もし少将大徳にやあらむ」と思い試みに、

いはのうへに旅寝をすればいと寒し吾の衣をわれにかさなむ

という歌を詠み掛けると、

よをそむく吾の衣はたゞ一重かさねばつらしいざ二人ねむと返歌をしたので、やはりそうかと思ひ、合つて話をしようとする、「かい消つやうに失せ」てしまった。

最後に世俗に残している子供（男・女各一人『今昔』のことが記されている。左近の将監をしていた太郎が尋ねてくる

と、
「法師の子は法師になるがよき」とてこれも法師になしてけり。

但し、此の太郎は無理に出家させたので、京に通つたりして仏道修行に熱心ではなかつたようである。

天皇の崩御を契機としてその葬送の夜に、忽然として姿を

消してしまふ。その形だけを見ると、潔く決然としたものがある。しかし、『大和物語』の記述をみると、三人の妻に対して、配慮している姿が窺えよう。出家した後も又色々な形で世俗と関わっている。世俗と距離をおきながら、全く没交渉ということではなく、肝心な所では、微妙な係わりをもっている。しかし、現代的な見方をすれば、彼が天皇への「不堪恋慕」（『続本朝往生伝』）して、出家したことにより、所謂家庭が崩壊した状態になつてしまつた。そして、太郎までも出家したのであるから、尚更その感を深くする。その裏には出家というものに対する考え方が、現在と大きく異なっていることを、念頭においておく必要があることは言うまでもない。

3

以上は、縁者を世俗に残している者が、どのようにその人々と接していたかに重点をおいて、述べてきた。次に少し視点を變えて、出家者と俗世との交わり方のいくつかを、あげてみたい。

・出家は大きな決心を必要とすることは勿論である。無常の世を生きているわけであるから、色々な契機には行合うのであるが、具体的な行動になるまでには、飛躍が必要である。

誰もみな、さやうの事はみるぞかし。（『死にたる人の頭の骨のありしを、つくづくとみしほどに、世中あぢきなくはかなくて、誰も死なんのちはかやうに侍べきぞかし。』）

さすがに岩木ならねば、みるときはかきくらさるゝ事もあり。いかにいはんや、まのあたりみし人のふかき情、むつまじき姿、さもおぼゆる振舞などの、たゞうたゝねの夢にてやみぬるは、ことに心もおこりぬべきぞかし。しかあれど、うかりける心のならひにて、時うつり事さりぬれば、こゑたつるまでこそなけれども、咲ひなども侍べきにこそ。

『閑居友』上巻二十話

眼前の事実によって、無常の様を観じた時には、出家の心も動いたのであるが、「時うつり事さりぬれば」、又もとの日常の生活に戻ってしまつて、世俗の塵にそまつて生きていくのである。しかし、『閑居友』に出でいるこの男は、「かゝるにこの男の、ふかく思ひれて、わずれず侍けん事」と、その事実をずっと認識し続けて、「うき世をいづる種と」したのである。

色々な縁によって、出家の本懐を遂げたとしても、前述したように「捨てはてた」はずの世俗と、係わりを持ちながら、出家としての生活を続けていくことになるのである。

迫り来る世俗の縁から、懸命に逃避しながら、その本旨を全うしようとした僧がいた。玄寶である。周知の『発心集』によってその生き方を見ておこう。

玄寶（玄敏）は、山階（科）寺に住していたのであるが、「世を厭ふ心深くして、更に寺の交をこのます」して、三輪河の近くに庵を結んで住んでいた。桓武、平城両天皇との係わりも辞退して、誰にも知らせないで、失踪してしまふ。方々

を捜索したが全く見付からない。その後何年かして、弟子が北陸の方へ行く途中、大きな河に出会った。その河の渡守をよく見ると、髪は延び汚い麻の衣を着ているが、我が師の僧都のようである。涙がこぼれてすぐにでも走り寄つて、「何でかくとでは」と言いたかつたのであるが、人も沢山いたので帰りによつてゆっくり話をしようと思つて立ち去つた。渡守の方も気付いている様子であつた。さて、帰途その渡しに行つてみると、前と違う渡守である。詳細に尋ねてみると、

さる法師侍り。年来此の渡守にて侍りしを、さやうの下臈どもなく、常に心をすまして、念仏をのみ申して、かずかずに船ちん取る事無くして、只今うち食ふ物なむどの外は、物をむさぶる心も無く侍りしかば、此の里の人もいみじういとほしう侍りし程に、何なる事かは有りけむ、過ぎぬる比、かきつけ様に失せて、行方も知らず。

と語つた。そのいなくなつた日は、弟子と出会つた日であつた。

旧知の弟子と再会することによって、再びもとの世俗に係わりを持ち、名聞利養の世界にかえることを恐れたのである。同様に世俗との交わりを拒否し、名聞利養の世界を忌避し続けた僧に、増賀がいる。

増賀は奇言奇行の人としてよく知られているところである。

『法華験記』（下巻八一）に、

冷泉の先皇講じて護持僧となすに、口に狂言を唱へ、身に狂事を作して、更にもて出で去りぬ。国母の女院敬ひ講じ

て師となすに、女房の中にして、禁忌の鈍言を発して、然も、また罷り出ぬ。かくのごとく世を背くの方便甚だ多し。

(原漢文)

狂事、狂言の具体的なさまは『今昔物語集』(巻十九―十八)「三条大皇太后宮出家語」に詳述されている。其れ等全て「世を背くの方便」であった。

ところが、世に隔絶して修行をするといっても、命ある人間としての日常の生活をしないわけにはいかない。従って、庵などの多くは人里と適当な距離をおいて、結ばれている。人里と全くかけはなれた深山の中に、結ぶというような例は少ない。それは生活上の至便を思ひはかつてのことであろう。『今昔物語集』(巻十六―四)「丹後国成合観音靈驗語」は、観音の靈驗を説く説話ではあるが、里との間の交通が途絶えた山寺の姿がえがかれている。

其ノ寺(成合ト云ふ山寺)高キ山ニシテ、其ノ国ノ中ニモ雪高ク降り、風嶮ク吹ク。而ルニ、冬ノ間ニテ、雪高ク降りテ人不通ズ。而ル間、此ノ僧、糧絶テ日来ヲ経ルニ、物モ不食ズシテ可死シ。雪高クシテ里ニ出デテ、乞食スルニモ不能ズ、亦、草木ノ可食キモ无シ。

という状態におかれてしまう。寺は破損しており雪や風が吹き込んでくるという様である。

今ハ死ナム事ヲ期シテ、此ノ寺ノ観音ヲ「助給へ」ト念ジテ申サク、……………

と「命ヲ生ク許ノ物ヲ施シ給へ」と祈請する。すると、寺の

戌亥の角の破れている所に、狼に食われた猪があった。躊躇しつつも「今日ノ飢ヘノ苦ビニ不堪ズシテ」、その肉を煮て食べてしまう。その味は格別で飢えの気持ちもなくなった。やがて、雪も消えて里の人々が、僧の身を心配して寺に来たので、鍋の中の猪の肉を隠そうと思つたのであるが、その暇もなくやってきてしまう。人々はそこで、鍋の中に「檜ノ木ヲ切り入レテ、煮テ食ヒ散シ」ているのに、出会う。そしてその木は、観音の左右のもの木であった。不審に思つている里の人に事の次第を説明し、観音の靈驗のあらたかさに感動するのである。

この説話は、題の示すように観音の靈驗譚であるが、雪に降り込められて食べ物もなく、困窮している僧の姿が、観音の靈驗を語る状況として描かれている。従って、この説話が共感を得る為には、そういう状況におかれて困窮している僧が、多く存在していたということであろう。先に述べたように、里と適当な距離を保って、居住することが肝要なのであり、世俗との係わりを背後にもつていたという事にならうかと思ふ。

ところが、世俗との係わりを拒絶して、全く人跡未踏のような場所で、修行をしているような僧もいたであろう。その場合はどうであろうか。『今昔』の巻十三の冒頭に掲載されている持経仙の説話は、その間の事情を教えてください。第一話(修行僧義脊、値大峯持経仙)を例にして考えよう。

義脊は、熊野から大峯を通じて金峯に行く途中の山の中に

道に迷つてしまふ。「山ノ頂ニ登テ四方ヲ見レバ、皆遙ニ幽ナル谷ナリ。如此クシテ十余日辛苦悩乱」してしまふ。そうしているうちに、一軒の僧房に行き合ふ。その僧房は、破風懸居からはじめ庭の作りまですばらしいものであった。坊の中には二十歳位の若い僧がおり、『法花経』を誦している。不思議なことにその経は、「一ノ巻ヲ読畢テ經机ニ置クニ、其ノ經空ニ踊テ、軸ヨリ縹紙ニ至マデ巻返シテ紐ヲ結テ本ノ如クニ机ニ置ク」。つまり、巻子を巻もどす手間がかからないのである。(これは巻子になっている本を読んだ場合、巻きもどしておくことが煩雑であるので、その手間を必要としないということ、靈験の様子を語っていることにならう。)又、食事などの日常に関しては「形端正ナル童、微妙ノ食物ヲ捧テ来テ」給仕していた。この山中に住して八十年になると言うにも拘らず、その姿は若々しくしている。夜になると牛頭、馬頭の異類及び鬼神等が香花、菓子、飲食を捧げて供養している。義脊の帰る時には水瓶を飛ばして道案内をさせる等、多くの靈験を具備している。各々の根拠は、例えば童の給仕している様は、『法花経』の中に求められている。勿論この説話の趣旨は結語に、「実ノ心ヲ至セル法花ノ持者ハ如此クナム。」あるように、『法花経』を受持誦誦することの功德を述べることにある。が、その側面には人跡未踏の深山において、仏道を修す人の生活する上の不便を補う形の靈験である。つまり、全く人と関わらない所で、自分から所謂生産に従事していない人が生活していくことは、困難なのであ

る。

4

今迄にいくつか例を挙げて見てきたように、出家をした段階で、世俗との縁を断ち切って仏道に精進するように考えていたのであるが、実はそうではない。出家者は出家して猶世俗との微妙なバランスの上にその生活は成り立っているのである。「世俗を背負つて生きる」ということであり、「世俗と関わつて生きる」ということである。従つて庵を結ぶ場所も、人里と適度な距離を保っているようである。長明が庵を結んだ日野山にもその麓に別の庵があった。

また、ふもとに一の柴の庵あり。すなはち、この山守が居る所なり。かしこに小童あり。ときどき来りてあひとぶらふ。若し、つれづれなる時は、これを友として遊行す。かれは十歳、これは六十。そのよはひ、ことのほかなれど、心をなぐさむこと、これも同じ。(『方丈記』)

山守の庵とすぐ連絡の出来る距離に長明は住んでいた。

『徒然草』(十一段)の中にも、ある山里のほとりにある庵の様子を述べている。

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたずね入る事侍りに遥かなる苔の細道ふみわけて、心細くすみなしたる庵あり。

山里から苔のはえた細道を通つて行くというのであるから、そう遠くない場所にあったものであろう。さらに又、次の文

章で、柑子のまわりに柵を嚴重にしているのが興冷めであると言っている。つまり、人がよく来るので盜難に合うことを心配してのである。深山の中にあれば、そういう心配も当然無用になるう。

時代はかなり後になるが『幻住庵記』に、

山はさすがに深からず、人家のよき程にへだてたり、石山を前にあてて、岩間山のしりへにたてり。

とある。「人家のよき程にへだてたり」というのが、具体的にどの位の距離を指しているのであろうか。そこに住む芭蕉のもとには、「宮守の翁」や「麓の里人」等が訪れていることを思うと、見当の付くような気もする。芭蕉自身が自分の境涯について、その後、

ひたぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさむともあらず。病身や、人にうみて、世をいとひし人に似たり。

と述べ、「病身や、人にうみて、世をいとひし人」に身を比している。

『撰集抄』「卷三・五」には、昔三井寺に学徒であった僧の通世の様子をのべているが、その庵は、

人里はるかに離れて、道より東に五六町山の中にいりて、庵をむすびて、とある。五、六百メートルぐらいの距離であろうか。その距離は、僧に世俗との隔たりを確認させるに十分であった。苦の根源は世俗の中にあることに由来している。

抑、人の身にはまりて苦しきは恨み也。なによりおこれるぞ、世にあるよりおこるものにこそ。世にあればこそ望

みはあれ。望みがあればこそ恨みはあれ、恨みがあればこそ嗔恨する。嗔恨すればこそ、せんぢやうする。されば、

心と苦をうけて作病するは、是世にある人にこそ。

苦をつくる根源としての世俗、その世俗から離れることが必須の条件であり、それには五六町の距離をおいて庵を営むことが肝心なのである。

おわりに

仏教の基本は周知のように煩惱からの解脱にある。煩惱から解脱する為には、穢土と呼ばれているこの世から、抜け出すことが必要である。穢土から離れてひたすら仏道修業をする。生まれてすぐに仏道を志すということはないので、当然今までの日常生活を捨てるといふことから、それは開始されるのである。「出家」という言葉には、其事情がこめられている。「家」とは世俗との諸々の関わりを総称する言葉である。

幸いに、色々な機縁によって出家したとしても、全く後顧の憂いのないような状態で、その時を迎えるというようなことは稀である。大概の人が世俗の中に色々なしがらみを残したままにその道におもむく場合が多い。その場合は、どうしても世俗に残したものが、出家者の心の中に気がかりなものとして、蟠っていることになる。しかし、身は仏門においているのであるから、思うがごとくに接することは出来ない。

その葛藤のなかで、その問題をどのように処理していったのであろうか。これが、この小論の課題であった。

西行は、『西行物語』によると劇的な出家を遂げるのであるが、その後折々につけて世俗に残した家族のことが、その心中に去来している様子がわかる。そのようにして何人かの出家者について検討してみると、それぞれが自分の背負っている世俗との関わりの中でひたすらに仏道を求めている様子うかがう事が出来る。そういう意味でいうと文字通り世俗を背負って仏の道にはげんでいるということであり、出家したあとは全く過去に見向きもしないというようなものではない。常に葛藤の中にいたのである。

そして又視点をかえてみると出家者の生活は、世俗との関わりの中で維持されているのである。実際に生きていく為の手段をもたないのであるから、当然といえば当然である。従って、世俗との適度な距離を保って庵を結ぶことが必要になってくるのである。乞食をする場合も又、何らかの供養をうける場合もその距離は大切である。

詮じるところ、出家生活は、世俗との微妙な相関関係の中で営まれているものであり、決して隔絶した環境や場所において行なわれるものではないのである。